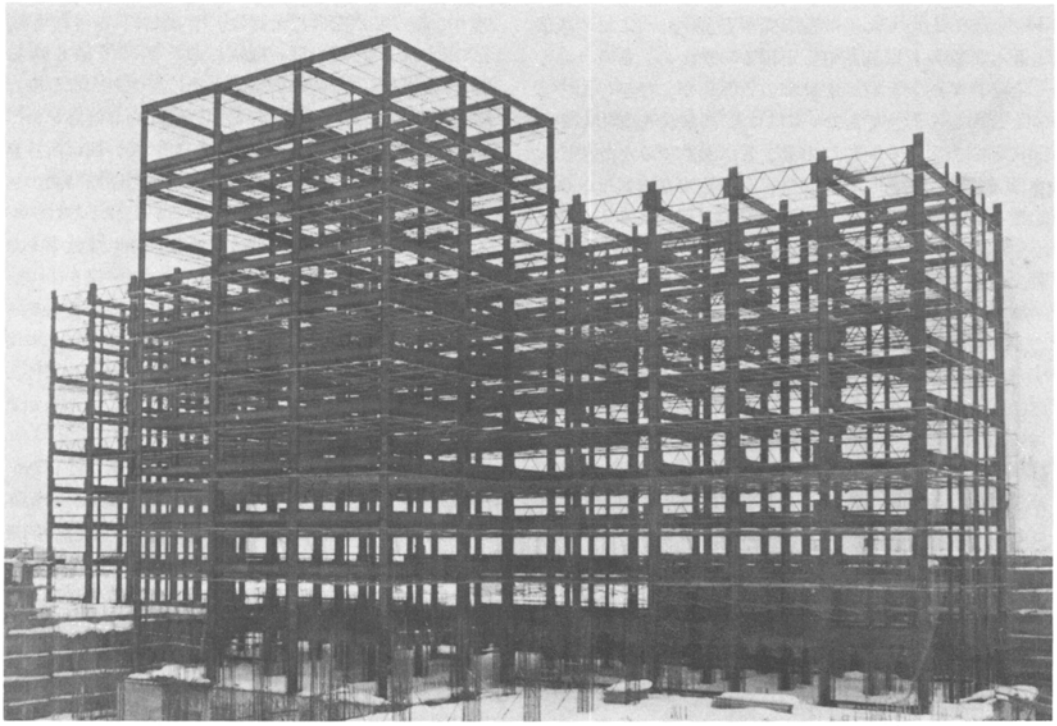
かぐらおか

（題字は山田守英学長）

第 3 号

昭和50年 3 月1日

編集　旭川医科大学
　　厚生補導委員会
発行　旭川医科大学学生課



工事中の附属病院

内　　容

附属図書館長就任にあたって…小野寺荘吉… 2
一般教育と物理……星野了介… 3
教育者とは何でしょうか？……藤沢　仁… 4
暫定施設のことども……鮫島夏樹… 5
旭川医科大学談話会…… 6
規程等の改正とその解説…… 6
スキー授業実施される…… 7
十勝岳山麓ですべる…… 8
全学スポーツ大会開催さる！…… 8
サークル紹介…… 9
お知らせ…… 12
編集後記…… 12

附属図書館長就任にあたって

小野寺　壯　吉

旭川医科大学の発足と同時に、附属図書館長事務取扱いという長い職名を頂戴し、それが今回正式の手続きを経て、あらためて図書館長の辞令を戴いた。ここで威儀を正して抱負を御披露申し上げるのが世のしきたりの1つと心得てペンを取り上げたのであるが、仕事の面では前と変わったわけでもないので、この機会を利用して、図書館の当面する問題点の2、3に触れてみたいと思う。

図書館は、主として印刷物を媒体とする情報センターとして、教育・研究機関の知的活動の基礎となるもので、大学の設置に際しては一定数の蔵書をもつことが必須条件とされている。

旭川医科大学附属図書館は当初約12.000冊の図書および雑誌(バックナンバー)をもって発足したが、これらはすべて寄贈されたものであって、しかも一般教育と基礎医学関係のものが大部分で、臨床関係のものはほとんどはいっていない。関連教育病院である市立旭川病院には、臨床医学関係の図書約6.000冊が所蔵されており、利用可能ではあるが、不便であることも事実である。館長として蔵書数にばかりこだわっているようであるが、大学院設置の基準に蔵書30.000冊、雑誌300種以上という1項目があって、もし大学院の設置がおくれれば、本学卒業生の卒後教育にとって様々な障害が考えられるからである。雑誌は製本されたものを1冊と数えるのであるが、これから1回生の卒業迄の4年間にどれだけ充足できるか、大学全体としていろいろ考えて戴いているのであるが、実際は容易なことではない。学年進行に合わせて目下、臨床関係の図書の充実につとめているが、医書の価格はかなり高くなってきており、目下の最大の悩みごとである。現在、ようやく蔵書約18.000冊、洋雑誌380種、和雑誌150種を購入して息を切らしている状態である。

事情御賢察の先輩各位からは、図書、雑誌バックナンバーの寄贈の申し込みを頂戴して、まことに有難く、この紙面を借りてあらためて御礼申し上げたい。医学教育に理解の深い篤志家でもあらわれないかと考えたりもするこの頃である。

さて蔵書数はそう急には増加しないとしても、図書館業務上の制約がかなり目立ってきた。職員数とスペースの関係で、整理の方も、閲覧業務の方も、スムーズに利用者の御希望に添えないことである。新規購入資料の受け入れ数が、新設大学であるため非常に多く、しかも同じ理由で人員は少ない。また現在週間月水金の3日間は閲覧室（単行本、製本雑誌）の開館時間を午後6時30分まで延長しているが、これは図書館職員の自発的な居残りであって、旧仮校舎時代、授業終了が午後5時30分になっていたため月～金曜、週に5日午後6時30分まで開館したことに始まる。よその課でも大なり少なり同様のことがあるわけであるが、個人的な好意をあてにしてサービスの向上などを申しても、長い間は所詮無理なことであるし、なるべく早く、正規の開館時間の延長にもって行きたいものと考えている。もう1つはスペースのことであるが、現在は3ケ所に分かれて仕事をしている状態で、合同講義室を1つ、セミナー室を1つ、おまけに2階のホールを仕切って使用させてもらっている。まったくタコ足事務であるから能率は下がる。これも、暫定施設に離れている職員もあることを考えれば仕方のないことであり、新設大学の宿命ともいえるかも知れない。

図書館の建物は50年度着工の予定であるが、新しい図書館は、印刷物だけでなく、広く各種媒体、フイルムビデオ装置、テープレコーダーなどを用いる綜合的な情報センターとなるべきと考えている。そうすれば、多角的な自己学習が可能になり、カリキュラムの合理的な進行の大きな手助けになる。これについての構想はすべて具体化されているわけではないが、たんに情報の集積から、さらにより有機的な多元的な利用を考えることが将来の図書館活動の方向であり、電算機の導入による機械化もやがて行なわれる趨勢にある。

抱負は一向に出ないで、嘆きが先に立ってしまったが、これで終わるわけにも行かず、本学の図書館の利点を1つあげさせてもらえば、それは最新刊あるいはそれに近い、ここ数年のものが大部分を占めていることで、利用価値は古い大学のあるものを凌いでいる。しかし新刊もやがて旧刊と化する運命にあるので、新しいうちに大いに利用して下さることを切に希望している。おわりに、月並な表現で恐縮であるが、結局は利用者各位の熱意が図書館活動の方向づけをするのであって、大方の御叱声、御協力をお願いする次第である。

（内科学第一講座教授）

一般教育と物理

星　野　了　介

一般教育という言葉が使われ出したのは新制大学が発足した時で、昭和２２年頃だったと思います。私が丁度北大物理の大学院を出た頃で、すべてが大きく変ろうとしていた時でした。大学に於ては、とにかく新入生がはいってくるのですから、一般教育ということが最大の関心事でした。しかしこれも自然科学をまかされた理学部と、人文系をまかされた文学部だけだったかもしれません。一般教育はGeneral Education の訳で、次の報告書がそもそもの始まりであったと思います。

Report of the United States Education Mission to Japan, submitted to the Supreme Commander for the Allied Powers, Tokyo, 30 March, 1946.

この中の一節に次のように述べてあります。「教育に於ては、科学がもたらす結果よりも、科学的な性格というものが国民の福祉にとっていっそう重要なものであるということは、現代の世界共通の経験にかえりみて、警告に値するものである。」、「自由な思考に対するいっそう多くの背景と職業的訓練の基礎となるべきいっそうすぐれた基礎を与えるために、より広い人文的態度を養成すべきである。このことは、学生の将来の生活を豊かにすると同時に、彼が、その職業上の仕事がいかに人間社会の全図の中に適合するかを見極めうるようにするであろう。」（玉蟲文一著〝科学と一般教育〟より）一般教育の理念は、以上で云い尽くされており、誰もが理解できる内容であったと思います。当時私ども旧制の教育を終えた者は、なぜこの理念を実現させるために、教育制度を変える必要があるのか、大いに疑問を持ったものです。しかし大学の教官になって何年かたってみて旧制の教育制度もいずれ改めらるべきものであったと理解できるようにもなりました。

本来一般教養というものは、限られた期間でこれでもうよろしいというものでないことは明らかですが、当面の問題として限られた大学教育のなかで、大学院も含めてどのように組みこんでいくか、その具体的な内容はいかにすべきかなどが深く検討されなければなりません。しかし実際は、充分な見通しのないまま見切り発車をせざるを得なかったのです。そして30年ちかく、ある規準の中で、また貧困な研究費、教育費のなかで各大学でいろいろな試みがなされました。教養課程と名のつく物理の教科書だけで、実に100種類以上もあります。そして学生数 200万人という今日において、なお教養課程は如何にあるべきか、と論議が繰返されております。このことは教養課程の問題と真剣に取り組む教官が少なかったこともひとつの原因と思われます。本来むずかしい仕事であり、大変な努力と忍耐を必要とし、しかもその効果は目にみえて現われないのですから、よほど良い条件のもとでなければ、投げ出してしまうのも無理がありません。

とにかく以上のようなことで出発し何年かたち、教養課程を終わった学生が専門に移ってくるようになりました。授業をはじめてすぐ云われたことは、〝こんなことも教養でやってこなかったのか〟〝一体教養で何をやってきたのか〟などなどです。私共は専門課程のカリキュラムの検討をはじめました。一方学生の側から見ると、入学試験一本にしぼった生活を続け、そして大学にはいった。希望に満ちた大学生活が教養課程ではじまります。やがて、これが大学というものかと考えるようになります。このあたりが非常に重要なところで、単に教養担当の教官にまかせておけばよいといった種類の問題ではなさそうです。

私は、旭川医科大学で物理学を受けもつことになりました。学生諸君は、いうまでもなく全員医学の専門課程に進みます。医学に於ては、物理学は基礎科目として重要視されつつあります。しかも相当高度な知識が要求されているようです。一般教養としての物理は、将来の専門にとらわれず、それ自体意味のあるものとして内容を考えなければなりません。医科大学では、基礎科目と一般教養科目の二つの性格を持つことになります。問題は実験を含めて週一回、60 週の中でどのようにして二つの要求に答えていくかということになります。もし基礎知識としての物理に重点をおきすぎると、あれも必要、これも必要と項目がふえる一方になり、ただ話を聞いたという程度に終る可能性があります。私は学生諸君が、将来いろいろな問題にぶつかったときに狭い専門分野からだけでなく、物理的な思考も多少はできるようになることを目標にして、内容を考えていきたいと思っています。どうも書いている中に常識的な結論になってしまいましたが、何らかの参考になれば幸いです。

（物理学教授）

教育者とは何でしょうか

藤　沢　　仁

医大で生化学の講義を始めて数ケ月になります。生化学の講座は残念ながら1つだけですから、私が生化学の教育に関して全責任を負わねばならないということになります。私の経歴から私が大学教育にあまり経験がないことを御心配下さる諸先輩方から、医学教育に関して涙もこぼれるような暖かい御忠告のお言葉を随分沢山いただいて参りました。お陰様で私は、教育者としての重い責任を感じますとともに、自らの無能さを省みて空怖ろしくなり身も心もうち震えるばかりでした。本来なら一念発起し教育者の鬼と化して、御教示いただいた責任とやらを果すべく努力すべきところでありますが、なにしろ無力な我身を想いますと責任の重大さに茫然となり自暴自棄となって、ついには教育者という言葉を耳にするだけで、吐気を催すようになって参りました。

我国の医学教育の水準は、欧米の先進国に比べると低く、従って医師のレベルも低いということを耳にすることがあります。我国の医学教育の年数が、米国に比べて少しばかり短かいのでそのためだろうとも云います。ですけれど例えば、医学の水準を測る尺度としてその国の平均寿命などを見てみますと、決して我国が欧米に比べて劣っているとは申せません。むしろ医学教育の年数が短かいにも拘らず、よくやっているという気持ちさえ致します。もっとも、我国には我国の制度があり、高い民度があり、風土があり、簡単に結論を下そうなどとは思いも致しませんが、我国の医師の水準が低いことを証明したいとお考えの方々も是非、まず統計的な data を示してからにしていただかないと納得のしようもありません。云うまでもなく私が申しあげているのは、技術者としての一般のお医者様の水準についてであります。医師が単なる技術者かどうかというむづかしい問題はさておくと致しましても、医師としての技術がなければやはり医師とは云い難いですから、医学教育の目的には技術の習得ということが大きな比重を占めていることは確かでしょう。とは云っても医師の技術は日進月歩でありますから、如何に完璧な技術者を大学で養成したとしても、10年もたてば時代に遅れていくことになるでしょう。卒後教育の重要性が説かれるのも当然かと思われます。生化学の教育が技術者としての医師の養成にどれだけ寄与できるかということを考えますと、甚だ悲観的にならざるを得ません。生化学は医学の中では特に進歩の速い分野のようで、例えば医大で教科書に使っている Harper の Review of physiological Chemistry は、1951年以来欠かさず2年に1度の改訂を受けています。恐らく10年前に大学を卒業されたお医者様方がお習いになった生化学は、現在私が学生さん達に話しているものとはまるで違ったものであった筈です。ですから私は、生化学を学生さん達と一緒に勉強しながら、この進歩の速さになんとしても食い付いていく根性を身につけてくれることを祈り、そして卒後にもその根性を少しでも残してくれることを期待しています。

古くから医は仁術と云われ、多くの人達は医師に必要なのは技術だけではなく、ヒューマニズムの精神がなければならないと云います。ヒューマニズムの精神は、1つの専門に閉じこもらない全人間的教養であるとも云われます。しかし学問や技術の進歩が極度に専門化した現在、全ゆるものを包含した全人間的教養というものを果して期待できるでしょうか。私達教官は合理主義に基づいた西洋医学のそれぞれの専門分野の講義を担当しているのでありますから、西洋流の自然科学に基いた各々の専門分野の教養から生まれたヒューマニズムを語るべきではないでしょうか。生化学の分野では、遺伝子の分子生物学的な研究から遺伝子(DNA)の2つの機能、即ち1つはRNA 転写に続くタンパク質合成による個体の保存と、もう1つは DNA 複製による種族の保存という機能が明らかになってきました。これらは食欲と性欲という人間の存在にとって根原的な2つの欲動となって現われるものでありましょう。このような欲動の尊重なくして、人間の存在もヒューマニズムもないであろうことは、多くの哲学者が指摘しているところであります。浅薄な全人間的教養からヒューマニズムを説かれる方々の中には、あたかも個体の保存と種族の保存とが対立しているかの如くお考えの方もありますが、これらは決して対立したものでなく、私達のもつ遺伝子(DNA)のレベルで完全に1つのものとして統合されたものでありますから、健全な DNA をあくまでも維持していくということこそが、医は仁術の基盤となるものではないでしょうか。大学人でありながら、一向に研究に御理解をお示しにならない方々もいらっしゃいますし、また現に教育と研究とが分業されたような大学さえもができつゝありますが、真のヒューマニズムは、極度に専門化された研究からこそ生まれるものではないでしょうか。私達人類は今後生き続ける限り、個体としても種族としても限界状況を生

きていくことを余儀なくされるでありましょう。このような時にお涙頂戴的な浅薄なヒューマニズムや、他のものへの逃避は許されないでありましょう。私は教育者という言葉は欺瞞だと思っている人間ではありますが、真面目で謙虚な一学徒として限界状況から眼をそらさずに、個体としても人類としても生きていきたいと考え、またその考えを次代の人達に話していきたいと思っています。何故ならそうすることが現在私達が直面しかかっている限界状況の中で、種族の保存をはかる道であるような気がしているからです。

（生化学講座教授）

暫定施設のことども

鮫　島　夏　樹

暫定施設について何か書くようにとのことであるが、私自身比較的最近までここに通うのは月に数えるくらいの回数であったから、とりたてて書くべき印象など持っていない。しかし昨年の秋頃から、ここに落着く日々が多くなって来ると、暫定施設も次第になじみ深いものとなって来たようである。医大が完成するまでの過渡的な状態として暫定施設の様子を記録しておくのが、あるいは編集者のねらいかもしれない。

昭和48年9月、旭川医科大学が開設され、一般教育課程の先生がたは仮校舎である北門町の旧付属小学校に教官室をもうけ、われわれ専門講座の教官達は関連教育病院である旭川市立病院内の暫定施設に移り、ここで基礎臨床研究棟が出来上るまでの約2年間を過すこととなった。われわれが実際にここに入れるようになったのは48年11月頃と記憶している。

暫定施設には市立病院の建物のうち、一番奥に建てられた3階建の旧結核病棟があてられた。病院本館と精神神経科病棟、隔離伝染病棟などに囲まれた中庭に入口があり暫定施設の看板が掲げられたが、近くに病院の剖検室や霊安室などもあったから、ここを通る時しばしば線香の匂をかいだ。建物の裏は提防になっていて、石狩川の清流が見えるひろびろとした眺めであった。われわれの研究室にあてられた病室の壁は新たにペンキで塗りかえられていたが、所々落書きがすけて見え、当初は病室特有の匂がするようであった。

その名の通り基礎臨床研究棟が完成するまでの暫定施設であるから、到底満足な実験など出来る設備はなく、基礎講座の先生がたもせいぜい実験器具の整備をするくらいが精一杯であったであろう。それでも解剖の先生などは不時の献体の処理に備えて泊りこんでおられた。

私が前任他、北大の研究室からとりあえず荷物をまとめて暫定施設に運んだのは48年11月中旬頃であったろうか。しかし臨床の教育がはじまるのはまだまだ遠い先のことであるし、医大での会議以外に特別な仕事がなく、また関連教育病院である市立病院とも個人的に時々診療上のつながりがある程度であったから、今までの仕事の都合上、もとの北大の研究室に通う日々が多かった。そんなわけで会議の日だけ旭川に来て日帰りで札幌に帰るという生活で、暫定施設に腰をおちつけるという日は比較的稀であった。ほかの先生がたも当時神楽岡の医大宿舎が出来たばかりで家族を連れてこられない方も多く、大なり小なり私と同様な生活であったと思う。

臨床の教官にとって一時的にもせよ1年～2年という期間、臨床から離れることが苦痛であるのは否定出来ない。関連教育病院である市立病院において、何らかの形で診療にタッチ出来ないかという点に関しては、2、3の希望はあっても実施面に多くの困難性があるようで、関連教育病院との話し合いはまだ軌道に乗っていない。こうした問題も医大創成期のもろもろの苦しみの中の一つであろう。

昭和49年5月、神楽岡に待望の一般教育課程の校舎、中央研究棟などが完成し医大は北門町の仮校舎から新校舎に移った。暫定施設で不便をかこった基礎講座の先生方もそちらに移転したため、暫定施設には以前からの臨床3講座(第一内科、第一外科、秘尿器科)に加えて新たに入ることになった49年度発令の臨床3講座（第二内科、小児科、産婦人科）および基礎の第2病理が残り、また2階の事務室に事務員2名が常在するようになった。しかし臨床の大部分の教官は依然としてそれぞれ前任地で仕事を続けているのが実状で、暫定施設は空部屋が多く閑散としていることに変りはなかった。

やっと昨年11月になって附属病院準備室がこちらの事務室に居を移してから、暫定施設も漸く活気が出て来

たようである。私も会議のたびに札幌から通うということも次第に出来なくなり、神楽岡の医大宿舎から約6キロほどの道程をバスを乗り継いで暫定施設に通う日が多くなった。そして会議がある時ここから神楽岡の医大に出かける今日この頃である。

あわただしく過ぎた2年間をふりかえると感慨深いものがある。つい2年程前まで、わずかに雑草の生い茂った神楽岡の曠野に、一般教育課程の校舎や体育館、中央研究棟が建ち、道路が整備され、いつの間にか新らしい町が出来た。基礎臨床の研究棟の外郭もなり、附属病院の大きな鉄骨が雪原に立っているのが遠くからも見える。こうして索漠とした野原に着実に学園が築かれて行く現実はたしかに目をみはるものがあり、医大関係者にとって幾多創成期の苦労があるだけに、また一層建設の喜びと春遠からずの感を深くするものである。

私達も今年の夏頃には、新築の研究棟に移転出来る見込みがつき、暫定施設での生活もあと数ケ月となった。初年度変則的な入学で苦労をなめた学生諸君はこの4月で早や3学年目に進むことになる。私が臨床の教育で学生に接するまでまだ1年有余の期間があるが、グループ担任をおおせつかったおかげで、年に1～2度はグループの学生諸君と膝をまじえて話し合う機会をもって来た。そのたびに自分も若かりし学生時代にもどった様な気持になる。若々しい医学を志向する精神が伸び伸び育って行くことを祈念する。やがて臨床の教育がはじまると、暫定施設であった市立病院は関連教育病院として臨床教育の一翼をになうことになる。これらの臨床実習を通じて学生諸君が将来良き医師、良き医学研究者となるために、医学を観念的にでなく自分の肌で感じ学びとってほしいと思うのである。新らしい医学教育としての関連教育病院方式は、少くともその理念において従来の医学教育の欠点を補う積極的な意味がある筈である。私達教官としても関連教育病院側の理解と協力の上に、新らしい医学教育を育てて行く努力をしなければならない。やがて去る暫定施設の窓から、そんなことをとりとめなく考えるのである。

（外科学第一講座教授）

旭川医科大学談話会

第9回～11回の談話会が下記のとおり開催されました。

（世 話 人）

第9回、1月21日　司会　松嶋少二（解剖学第二講座）

演題及び演者

(1)　「狭心症治療薬の作用機序」　安孫子　保（薬理学講座）

(2)　「記号現象と間主体的認識」　岡田雅勝（哲学）

第10回、2月4日　司会　安孫子　保（薬理学講座）

(1)　「催奇性の検定について」　清水哲也（産婦人科学講座）

(2)　「Randers space について」安田　博（数学）

第11回、3月4日　司会　清水哲也（産婦人科学講座）

(1)　「膵臓の病気について」石井兼央（内科学第二講座）

(2)　「いわゆる開拓使10年計画について」　原田一典（歴史）

規程等の改正とその解説

国立学校設置法施行規則の一部を改正する省令（昭和49年文部省令第21号）の施行により、本学の事務組織が改組され学生部が廃止されたこと、及び参与が設置されることになったこと等に伴い、学内諸規程を次のとおり改正しました。

（庶　務　課）

1．学生準則の一部

学生部長職の廃止に伴い、準則第21条の掲示の届出及び同第22条の印刷物配布の届出を、「学生部長」から「学長」に改めました。

（昭和49年11月27日から施行、昭和49年6月7日から適用）

2．授業料の免除及び徴収の猶予に関する規程の一部改正

学生部委員会の改組に伴い、規程第5条の授業料の免除及び徴収の猶予を審査する委員会を、「学生部委員会」から「厚生補導委員会」に改めました。

（昭和49年11月27日から施行、昭和49年10月25日から適用）

3．学則の一部改正

本学に参与が置かれることとなったことに伴い、学則の第16章を第17章とし、第47条を第48条とし、第15章の次に次の一章を加えました。

（16章　参与）

（参　与）

第47条　本学に参与を置く。

2　参与に関し必要な事項は、別に定める。

（昭和49年12月11日から施行）

4．掲示等の取扱いについて

学生準則の一部改正により、掲示物の届出及び立看板の掲示場所の指定者を、「学生部長」から「学長」に改めました。

また、規則の整備を併せて行い、掲示物の大きさは「原則として新聞紙1頁程度」を「原則として新聞紙1頁以内」に、掲示期間は「原則として5日以内」を「原則として7日以内」にそれぞれ改めたほか、掲示等の届出の受付を、学生の場合は、学生課学生係と明記しました。

なお、改正後の規則の全文は次のとおりです。

掲示等の取扱いについて

（昭和49年11月27日一部改正）

学内における掲示等の取扱いは、次の要項によるものとする。

要　項

1　掲示の場所・使用種別等は次のとおりとする。

場　所	使　用　種　別
公用掲示板	大学公示用 教職員対象 学生・学生団体対象
学生用掲示板	学生及び学生団体用
一般用掲示板	学会その他、一般 （学生・学生団体を除く）
学会における講演会等の連絡及び受付場所の指示等のため立看板による掲示は、学長が指定した場所とする。	

2　掲示物はその使用目的に応じ、所定の場所に限り掲示すること。

3　掲示物の大きさは、原則として新聞紙1頁以内とする。

4　掲示の内容が特定の政治目的をもつもの、虚偽の記述もしくは名誉毀損にわたるものであってはならない。

5　掲示期間は原則として7日以内とする。

6　掲示場所の使用手続は次のとおりとする。

(1)　掲示物及びその写しを学長に届出て、検印及び掲示期間の指定を受けなければならない。

(2)　掲示物には責任者名を記載しなければならない。

7　掲示等の届出の受付は、学生に係る掲示については学生課学生係、その他の掲示については庶務課文書係において行う。

8　この要項に定める事項に違反した掲示物は撤去する。

スキー授業実施される

今年度も昨年度と同様に保健体育科目としてスキー授業を市内富沢にある伊ノ沢スキー場で実施しました。

第1学年の学生諸君の中には、初めてスキーに乗る者もおり怪我等の事故が心配されましたが、市内の大学、高専等からスキー指導員の先生方6名に担当をお願いし、事故もなく無事終了しました。

スキー授業日程

第1学年　1月18日(土)、25日(土)、2月1日(土)、8日(土)、15日(土)　5回　各4時間づつ計20時間

第2学年　2月22日(土)、3月1日(土)、2回　各6時間づつ計12時間

十勝岳山麓ですべる

去る3月6日(木)、初めての課外教育としてスキーを実施しました。これには学長はじめ医療担当副学長、グループ担任教官およびスキー指導の体育教官（非常勤）ならびに学生多数が参加して行なわれました。

旭川を午前8時30分に出発し、十勝岳望岳台には午前10時に致着、ゲレンデで体育教官からスキーについての諸注意や大雪連峰の紹介などがあった後、参加者はスキーを楽しんでいました。

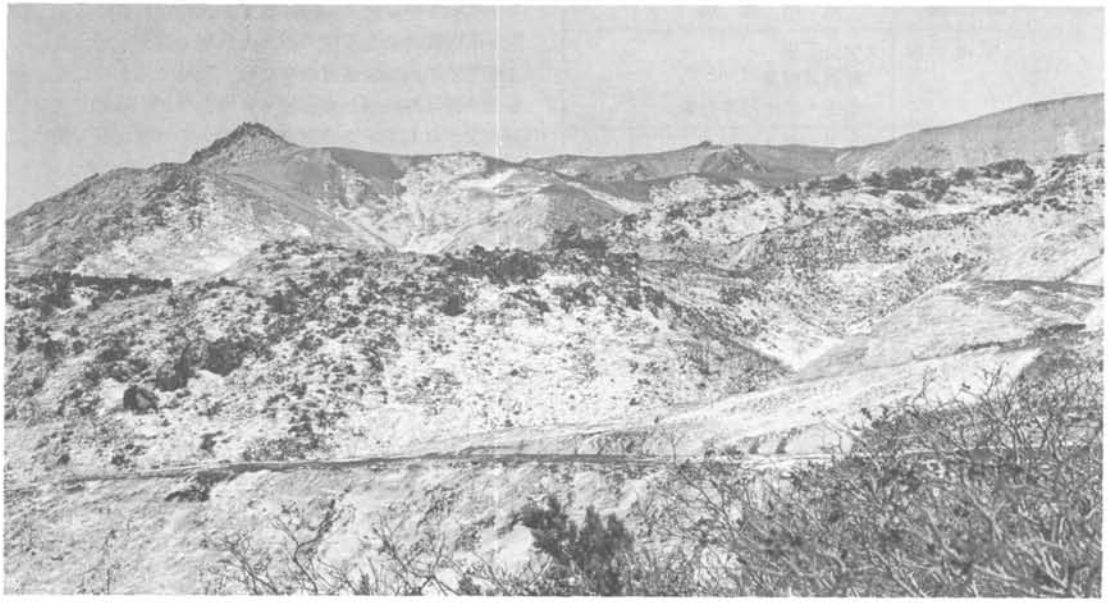
当日は絶好の晴天に恵まれ噴煙を上げる十勝岳や美瑛富士などを背に白銀の世界で思う存分スキーを堪能していました。午後2時30分に望岳台に集合し、スキー技術別に班別し、班ごとに林間コースを滑降、白金温泉を午後3時に出発し帰旭しました。

（学　生　課）

全学スポーツ大会開催さる！

学生、教職員有志の発案による全学スポーツ大会が2月10（月）から3月15日（土）までの間、昼休み時間を利用して、本学体育館で開催されました。競技種目は、卓球、バスケットボール、バドミントン、バレーボールの4種目で、試合方法は各種目とも、3チームでのリーグ戦を行って1、2位を決め、引続きトーナメント方式で、優勝チームを決定しました。参加チームは、1年A組、B組、2年A組、B組、教官チーム、事務職員チームの6チームで、背に同僚の声援を受けながら、なごやかな内にも白熱した好試合が展開され、どのチームがどの種目に優勝し総合優勝を勝ち得るか、この間学内の話題はこのスポーツ大会に集中していました。

（学　生　課）



サークル紹介

ラグビー部

旭川医科大学ラグビー部は開学と同時に打倒早稲田、リコー、ブリテッシュライオンズの三目標を掲げ、有志X名、義理人情冷やかし半分の（14－X）名で結成された伝統あるクラブです。今年度も着実に3名加入により堂々17名の部員を擁し来シーズンに備える医大中屈指のスポーツクラブに成長しております。今年度の活動の主なものを挙げると6月の対道教育大旭川分校戦、この試合は我がラグビー部のデビュー戦でしたが、シーズン始

めの練習不足と、試合経験者不足のため惜敗してしまいました。8月には夏季合宿を行ない体力と技術の養成に努め、10月には、旭教大と雪辱戦を行なう予定でしたが、対旭川ラガー戦となり吹雪のなかで奮闘しましたが力及ばず苦杯を嘗めました。以上の如く遠大な目標に向かい着実に進みゆくクラブです。ラグビーというとたいへん危険なスポーツのように思われていますが決してそのようなことはありません。部設立以来、一名の負傷者もなく、引退した一名を除き、脱落者もなく和気藹々にやってきています。本学のみなさんのあたたかい声援をうけ、すばらしいクラブになろうとしています。旭川の大学中、第2位の我がクラブ員一同の願いは「勝ちたいなあ」の一言に尽きます。なお、女子マネージャーと男子部員を募集しております。（逆も可？）

（責任者　磯辺雄二）

バレーボール部

旭川医大バレーボール部。部員7名。バレーボールは6人で試合をする事を考えれば、いかにも小世帯です。

ここでクラブ活動の一つの目的、また結果である部員間の親睦ということを考えれば、いままでバレーボールなど全くといってよい程やったことのない人にも、経験者が手取り足取り教えながら共に汗を流すのもクラブの一つの在り方であり、私自身そういったムードは大好きです。

しかし、それこそ目標を世界に置き、日々に切磋琢磨し、ハイレベルでの技術向上を目指すチームもあります。そこには技術の伴わないチームワークなど存在すべくもありません。「なれあいのチームワークなど勝つ為に何のたしにも成らない」と彼等は言うのです。

それ程でなくとも大学の運動部として、他校との親睦試合を行ない、また公式戦に出場となると、ある程度の技術がないと選手として出場できません。バレーボールというのは一瞬しかボールにさわっておれず、ボールは常時空中に漂っています。昼休みに円くなってみんなでパスなどをしている分には良いのですが、いざ試合となると技術の未熟な人が一人でもいると、その人の所へボールが行く度に〝ピピー〟ホールディング、〝ピピー〟ドリブル。幸いに反則を取られなくてもボールは無情にもあらぬ方向へ。その度にサーブチェンジか相手の得点。バレーボールは一人一人の責任が重く、またミスのはっきりわかるゲームなのです。また大学・一般の2ｍ43の高いネットでブロック、アタックを一人前にやろうとすれば、それ相応の身長、ジャンプ力が必要です。そして辛いのは現在の我が大学の学生数が200人足らずで、医学部だけの単科大学であることなどの事情で、なかなか部員の数はふえそうにありません。人数が少ないと球拾

いに困り、実戦的練習に困ります。

しかし小世帯には小世帯なりの長所もあります。それは容易に想像がつくことですが、部員間の結び付きの強さです。各人の性格もプラスに作用してかバレーボール部は特別にみんな仲が良いようです。でもこのことは団体競技全体に共通することですが、出る試合出る試合い

つも負けてばかりいたのでは、チームワークは生まれてきません。目標に向って全員が努力し、その努力が報われた時、同じ喜びを皆が（たとえその時ベンチに座っていても）共有する。こうして目に見えない連帯感が芽生えるのです。試合に勝つ為の全ての要素の集約はそれ故に意味があるのです。

ところで大学のクラブというのはなかなか大変なもので、高校で後輩を絞りに行く時の気楽なのとは随分違います。大学生ともなると自意識が強いのは当然です。伝統がなく、指導してくれる先生も先輩も居ないのですから、一人がアタック練習をしようと言えば、他の一人はレシーブ練習を、といった具合。フォーメーションや技術的な考え方の違いともなると容易に収まりません。またいま迄バレーをやったことのない者が2人おり、全体的に見て個々の技術が未熟であり、かつチームとしても若いのでプレーにミスが目立ち罵声さえも飛び交い勝です。技術の伴わない信頼感などあり得ませんから、当分今の辛い状態が続きそうです。

チームの目標は、来年の東医体優勝ですが、まあ無難でしょう。できれば毎年優勝を狙う伝統あるクラブにして行きたいと思います。クラブとしての目標にOB、現役が一丸となって頑張るのは良いものですから。

（責任者　浜崎　卓）

バドミントン部

我々バドミントン部は総勢15名から成る大部隊である。うち女子が2名しかいない事は甚だ遺憾ではあるが、本学の男女の割合からおして致し方ないようにも思える。どうか全学の女性諸姉、この紹介文を読んで「私もやりたいワ」とちょつとでも思われた方は是非入部していただきたい。女性に限り部費は2割引にします（この一文冗談）。ところで巷ではバトミントンなど、誰にでも簡単にできるハゴ板モドキのお遊びとお思いの方もおられると思うが、アマイアマイ、バトミントンは強靭なる脚力・内臓、長距離ランナーにも匹敵する持久力、そして次の敵の動きを予測する鋭い読み、的確な判断力、強い精神力を必要とするスポーツなのである。そして、これらの目標に向かい全部員は毎日、ではなかった週2回ではあるが、汗まみれ血まみれ(？)になって特訓に励んでいるのである。部員の多くは高校時代にバドミントンをしたことがなく、この4月には目も当てられぬ状能であったが、今では練習の成果が徐々に現われ、どの部員のラケットからも鋭いスマッシュ音が生まれているのである。そして、ここについに、練習の成果を世に問うべく去る11月23・24日の両日、旭実高で開かれた全道バドミントン新人戦に初出場した。その成果はそれ程かんばしくなかったので、敢えてここには書かないが、参加した部員一同、力一杯戦ってくれ、これらの部員がみな去年の4月にはズブの素人であったとは思えない程上達したことは、部長としてもうれしい限りであった。とにかく全道のレベルを知っただけでも勉強になったと思う。また、一度対外試合を経験すれば自信もつくと思うので、今年は是非とも新入部員も大いに入れ、昨年以上の戦績を上げたく思う。なお、入部希望者はI－Bの楠まで、部費は月わずか200円と格安であります。

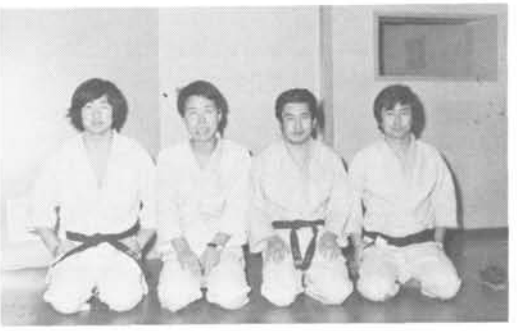
（責任者　楠　祐一）

柔　道　部

「柔道部のごくささやかな自己紹介」

〝精力善用自他共栄〟こそは講道館柔道の創設者である加納治五郎先生の言葉であるが、同時に我が旭医大柔道部の座右銘である。

柔道部は一年生の柔道熱愛好家を中心にして、49年の春、周囲から一身に期待を集めて結成された。以来他のクラブを圧倒し、めざましい活躍をしている…と書きたいところだが、対外試合を経験したことがないので(実力は十分にあるのだが）残念ながらあまり大きなことは



いえない。我が大学には不幸にもまだ道場がないので（近い将来必ず建設されると確信しているが）水・土曜を中心に旭教大の道場に遠征し、教育大柔道部を圧倒して激しい練習を重ねている。ことに石川主将は、まさに柔道が服を着て歩いているという形容がぴったりする柔道の鬼で、柔道に生命をかけているといっても過言ではない。足かけ40年やっているというわさだ。従ってその指導は厳格である。しかし一旦厳しい練習が終ると、彼は

柔和な好青年となり、我々部員一同は有段無段の別なく石川主将を心からしたい、一致団結を堅持している。

医大柔道部は時おり教育大柔道部と合同コンパをもつが、ここにおいても医大は教育大を圧倒したもて方を示す。ハンサム、美男子、好青年ぞろいの医大柔道部としてはごく当然自明のことと自他共に認めるところだ。

さて、我が柔道部はまず北海道制覇をめざす。これは明日への排戦の初歩的段階であり、次に日本を制覇し、最終的には世界の柔道を背負うことが決定している。このような輝かしい未来がすでに約束された我が医大柔道部は未来永劫恐るべき発展をとげるであろう。

（責任者　石川裕司）

剣　道　部

我が剣道部は、「礼に始まり礼に終わる」という銘の下に、日夜練磨せんと願うにもかかわらず、部員の士気未だ上がらず、今尚混迷状態を脱し得ず、活気ある部活動を求めて、虚しい精進を繰り返すばかりである。
唯新入部員の発奮が、せめてもの慰めである。
微弱な活動ながらも、我が剣道部の信条は、剣の道を通じて、心身共に鍛練し、実り多い学生生活を送る事にある。それが、我々のささやかな祈りでもある。

剣道部の紹介に際し、剣道の変遷を述べる事が、最も適切であろう。そもそも剣道の起源は、剣術に由来す。剣術とは、戦場に於ける技術である。生き抜く為には、殺人をも辞さない。これが、戦場の掟である。この掟の中で創造されたものが、剣術と言っても過言ではない。従って剣術には、組み打ち、当て身等が含まれる事は当然である。戦国時代の争乱の中で、剣術は、単に、殺人の道具として使用された。剣術の支柱は、生き抜く為の闘争であった。争乱期を経過し、生き抜く為の闘争が、時代錯誤的な過去の遺物と化した時、剣術界に生きた武人は、当惑し、仕官の夢を断たれた事を知った。
宮本武蔵も、その一人であった。
仕官の夢に、青春の情熱を賭けた武蔵にとって、戦争は己れの生きる証であった。野獣剣、外道剣を駆使し、決闘に臨んだ武蔵にとって、剣は己れ自身であった。

独創的な二天一流を模索し、名を棄て実に生きた武蔵なればこそ、活人剣を厭い、殺人剣に全てを託した。肥後の片田舎に隠遁し、異端者として淋しい人生を歩みながらも、筋を貫き通した武蔵なればこそ、「道」を悟り得んと努めた。その武蔵が、……あれ程剣に激烈な執着を示した漢が、剣を捨てた時、剣豪から剣聖としての道が始まった。「道」は、人間の思考故の性と、人間という動物故の性の極限にある。生き抜く為の闘争に徹した武蔵なればこそ、「道」を知り、「礼」を認め得んと努めた。「礼」とは、俗世間的な、安価な礼儀作法の事ではない。「礼」とは、決闘直前の厳粛にして至純な一瞬である。「礼」とは、二者択一の穢土を去り逝く命への、せめてもの誠である。武蔵以後、多数の剣豪が、様々な流派を作り、剣術から武道剣道へと移行し、その武道剣道は、終戦後スポーツ剣道として生まれ変わった。幸か昭和元禄花吹雪の中で、我々は、竹刀を振っている。

（板　野　哲　明）

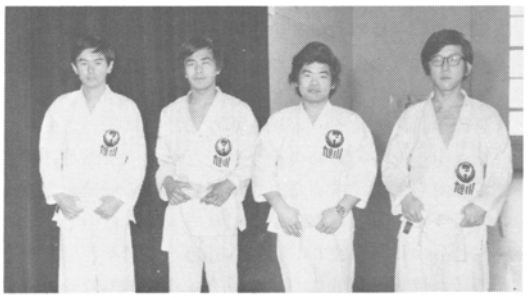
空　手　部

我が空手部は49年春結成された二期生だけのクラブです。現在部員は６名でほとんど経験者がいないので、本格的な指導を仰ぐため、月・金の週２回全空連の道場へ通っていますが、部員の中には家庭教師や他のクラブをやっている人が多いので、午後６時～９時の練習は少し時間的に負担になるのではないかと思います。その点伝統もあり、有段者も豊富で、学校で練習がみっちりできる他大学の空手部をうらやましく思います。

こういう状態なので、学校での練習はしばしば随意的になりますが、それでも我校のクラブの中ではかなり練習熱心なクラブだとは思います。

前期は時間割の関係で水・土の２日を学校での練習にあてていましたが、自由な空気が強すぎたようで、ブルースリー流の空手をやったり、ヌンチャクで遊んだりしてどうも練習に熱が入りにくいようでした。

10月に初めての昇級試験があって、この頃から練習は毎日、内容も他大学に劣らない程になったと自負していますがまた、よく練習に出る人と出ない人とがはっきり別れてきたようです。しかし一年生同志では強制力が



ないから仕方がないようですが、今後も部員一同頑張っていくつもりです。

練習は柔軟基礎体力の他、素突き素蹴り（これは単調ですが難しく、初心者には一番苦しい練習です）、基本、形、までが前期にやっていたもので、後期からは組手を加えています。とくに自由組手は空手修業の最終目標で初心者がやると危険なので普通は緑帯までは許さないのですが、今はみんなかなり上達していて、次の試験には確実に緑帯はとれそうなので大丈夫と思います。

以上クラブ紹介を書いてみましたが、空手の魅力を十分表現できたと思いません。腕に自信のある人は一度入部してみてはどうですか。

（責任者　猪俣光孝）

弓　道　部

弓道、これほど一般に認識されていないスポーツもないのではなかろうか。その理由も種々あると思うが、その一つとして、完全にスポーツ化した洋弓みたいに、手軽に行なえない事があるのではないか。またスポーツ化しきれぬ弓道の追い求める理念や、弓術法の最合理化した形態である礼儀作法を、戦前の体練科武道として、実戦に直結させる方向に走った国家神道的思想として見てはいまいか。しかし弓道は近代科学の研究等により、新しい武道理念のもとに、高校・大学スポーツ、また社会人スポーツとして現在盛んである。北海道において弓道は、風雪の地にもかかわらず、多数の優秀な射士を生み出している。

よく弓道の面白さは何かと聞かれる。その時は単純明快に、的に中てる面白さを挙げる事にしている。二十八メートルの彼方から、直径三十六センチメートルの的めがけて、一心に自分と的との一体化を求めつつ、無心に矢を放つ。「ヒュー」と風をきり矢は的に吸いこまれていく。中った時のあの爽やかさ、ただその快感だけを求める。何も効用は求めない。無価値の中の価値。先人もこのように弓を引いたのか、己れ一人静寂の中で、この現代社会の雑音を離れ、孤独を超越して黙々と弓を引く。そこには技術も、的に当てようとする邪心もない。体、弓、的が三位一体となる。

現在弓道部は旭川国鉄弓道場を使用し、基礎練習は学校の体育館で行なっています。またよりよい部活動のために、道場設置を学校に要請しています。弓道は特に基本体が重要なため、旭川地区連盟会長、中川七段教師を師範として、萬上六段練士をコーチとして招聘しました。どうぞ弓道部へ。　（責任者　近藤啓史）

訃　　報

本学第一期生２年Ａ組、星　敏弘君（20才）は、去る２月２日午前７時53分に旭川市立病院において激症肝炎のため急逝されました。

星君は福島県の出身で希望に満ちて勉学に励むかたわらサークル活動にも力を入れるなどバイタリティーにあふれた青年でありましたが、志半ばにして逝去されたことは誠に残念であります。

ここに慎しんで星君のご冥福をお祈りします。

（学　生　課）

お　知　ら　せ

本学の住所が次のとおり変更になりましたのでお知らせします。

（新）旭川市神楽町神楽岡３番地１１

（旧）旭川市神楽町神楽岡３番地１３

編　集　後　記

陽ざしはもう十分春を感じさせながらも、肌には冷たい３月の風を何にたとえたらよいのでしょうか、窓の外にはまだ沢山の雪が残っているものの、ここ神楽岡にも春が近づいて来ました。長い間冬の風にさらされていた病院の鉄骨は、いまようやく明るさを取り戻したようです。

仕事に追いまくられながら第３号をお届けします。これから入試が始まろうとしています。３月といえば、どこの大学でも卒業式がありますが、ここにはまだありません。４月に新しく100名の学生を迎えます。新しい大学だけに、いろいろな問題をかかえておりますが、年毎に充実し、整備されてゆくことを願うのは私だけではないでしょう。

忙しい中から附属図書館長と３人の先生方に執筆していただきました。厚くお礼申し上げます。（T）